

巻 頭 言

「実際と芸術とそれが融け合って、一つの流れになることが出来るように、自由学園の他のすべての学科も方面もまた、密接な関わりを持って一つに融合することが出来るように」。

1921年2月、「自由学園の創立」を告げる文章に記された一節です。

教科と実際生活と芸術が、無関係にばらばらに扱われるのではなく、それぞれを密接に関わらせながら一つに融合させて学ぶこと。そのような学びを通じて、活きた知識を身につけ、感性を磨き、自ら考える力、表現力を養うこと。自由学園の教育が目指す方向がここに示されています。

教科を融合するような学習法は、思考力や判断力を養う上で有効とされ、最近では大学入試の新テストとして、「合教科・科目型」入試の導入が検討されています。

「生活即教育」を掲げる自由学園の学びの特長は、学習が実際生活と結びつくところにありますが、ここで注目したいのは、創立以来、芸術が人間教育の重要な要素として位置づけられている点です。しかしこの芸術分野が目指すところは単に作品を作り鑑賞する力を養うことにとどまりません。

創立者は美術教育の主旨は「どういうもののなかにも秘されている美を見ることが出来るような深い心」を培うこと。「本当に美を感得することが出来るようになれば、めいめいの棲む家や、着る着物や態度や動作やその他すべての事柄の上に、自らその心を表現することが出来るようになる」と述べています。すべてのものの中に「美」を見出す「深い心」が、深い生活を作り出し、深い生き方を導くというとても深い考え方です。

創立者はこのように生徒の「深い心」を育てたいと願いましたが、私はこの言葉を私たち教師への問いとして受け止めました。私たちは生徒一人ひとりの中に秘められているそれぞれの「美しさ」に目を注ぎ、この教育に当たっているかという問いです。ここに合科学習や美術教育を超える、キリスト教に根ざした人間教育の意義が示されます。

年報21号は各部の美術教師が美術工芸展を振り返り、文章を寄せています。先生方の言葉に、「深い心」を持って根気よく一人ひとりの生徒たちに向き合ったその過程を読み取ることが出来ることは本当にありがたく、うれしいことでした。

真中昭典先生のアメリカ研修報告書は今後の学習形態を考える上で示唆に富むものでした。熱心に取り組んだ生徒の理科課題研究レポートもどうぞお読みください。

2017年10月

学園長 高橋 和也